

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

Reading “Genroku no Ooengi” (the major history authorized in the Genroku period) regarding the Naritasan - Shinshoji Temple

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-08-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 湯浅, 吉美 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1126

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



成田山新勝寺「元禄の大縁起」をよむ

湯 浅 吉 美

一 はじめに

本学のスクールバスの運転席付近に成田山の「交通安全」御札が祀られていることを、通勤・通学に利用される方々はお気付きであろう。そしてこの成田山（新勝寺）が、かの空港のある千葉県成田市に所在する大寺院だということも、多くご存じと思う。しかしながら、その成田山新勝寺がそもそもどういう由来を伝える寺院なのかということになると、あまり知られていないかもしれない。筆の遊みに過ぎぬ、あるいは埒もなき埋め種との非難もあるが、今回はそのあたりを紹介したい。

とはいえ、寺伝によれば一千年を超すというその歴史を、筆者が一から説き起こすわけではない。成田山新勝寺には、江戸時代の元禄十三年（一七〇〇）に撰述された「元禄の大縁起おほ」と呼ばれる資料が伝わり、新山の山史はこれを根本史料と位置付けてきた。内容的には史実と認め難いところがあるが、一般に寺院の縁起（由緒書）とはどのようなものであるかを知りうる好個の例といえるので、その全容を示すことにより、上記の目的を果たすつ

もりである。ただし今回は、史料としての学術的要素、すなわち書誌データと原文（漢文）とをば掲げず、訓読文と現代語訳とを提示する。したがって、本誌の執筆ジャンルのうち、「資料紹介」を名乗るわけにはゆかないので、内容のそぐわぬことは不本意ながら、「研究ノート」として提出した。

なお、断るまでもないが念のため一言しておく、小稿を以て筆者が、特定の宗教・宗派や神社に対する信仰を、勧誘したり推奨したりするものでないことはもちろんである。成田山は人も知る如く、正月三日の人出において連年全国のトップ3中に占位し、参詣者数は三百万人を上回る。これだけの数の人々が何らかの思いを託しに訪れるという事実を見れば、それはもはや「ニッポンの文化」の一翼を担っているといつてよいであろう。つまり一寺院の由緒来歴に止まらない、文化的事象である、そう受け止めていただきたい。

二 縁起の概要

本資料は成田山新勝寺の縁起として根本に位置付けられており、

開創にまつわる話が、伝存する三種の古縁起の中で最も詳細に記述されている。まず概要を記しておこう。

平安時代半ば、承平五年（九三五）に平将門が反乱を起こした。伯父国香らの殺害に始まる将門の行動は次第にエスカレートし、坂東諸国の国府を襲撃してこれを制圧、ついには新皇と僭称して独立を標榜するに至った。時の朝廷は追捕使を発遣して武力鎮圧を試みるも、容易に将門を降すことはできなかった。そのとき朱雀帝の密勅を蒙ったのが寛朝である。寛朝は洛西高雄・神護寺護摩堂の本尊不動明王を奉持して下向し、国家安穩の護摩を勤修。程なく将門は藤原秀郷・平貞盛に斬られ、さしもの乱も終息した。さて、帰洛しようとする、如何にしても明王を動かすことができなればかりか、この地に留まり衆生を利益せんとの靈告を下された。そこで寛朝は独り都に戻り、この旨を帝に奏上したところ、帝はたいへんに喜び、伽藍を建立して寺号を「神護新勝寺」と賜ったという。

また、後に浄土宗の高僧として知られるようになる道誉が、若いころ不動明王の靈験を受けた話も載っている。天性愚鈍であった道誉が当山に祈願したところ、利鈍二振りの剣を提げた明王が現れ、彼の咽喉を切り裂いた。ために悪血ごとごとく流れ出で、一変にわかには頭腦明晰となったという靈験譚である。

本文に先立って、撰者覚眼の略歴も記しておく。寛永二十年（一六四三）に薩摩国に生まれ、郷里で出家したのち、元禄八年（一六九五）に醍醐寺の有雅から真言宗報恩院流を受法した。江戸に出て芝愛宕下の円福寺に住し、宝永二年（一七〇五）に第十一世智山能化（智山派のトップ）となる。同六年には大僧正に

昇ったが、これは智山派における大僧正の初例である。のち再び江戸に下り、護持院で新義派僧録職（宗派の総務）を務めた。字は空覚、また抱拙と号する。経歴的にも最高の地位に昇ったのみならず、著述の多い、当時屈指の学僧でもあった。大縁起の原本は覚眼直筆と見られる。

三 訓読文

まずは訓読文を掲げる。原文は漢文であり、返り点も振り仮名も施されていないからして、すべて「筆者の訓み」に過ぎない。いささか事々しいけれども、いわゆる総ルビとした。また、適宜に段落を分けた。〈〉で括った字句は、原本にある割注である。

下総国成田山神護新勝寺本尊由来記

総の下州埴生莊、成田山神護新勝寺は、聖無動尊垂応の靈場、真言密教相應の梵刹なり。

夫、当寺の本尊不動明王并に矜羯羅・逝吒迦二童子は、弘法大師の手足から親しく雕刻したもう所、中尊は長六尺の坐像、二夾侍は共に三尺、其の左面は立像、其の右面は坐像、而して嵯峨帝より葉々玉體擁護の靈像なり。在りし昔は洛西高雄山神護国祚真言寺護摩堂の本尊なり。

緬かに此の尊軀を我が山に安置せし来由を繹ぬれば、人皇六十一代朱雀院の御宇に丁り、桓武天皇五代の後胤、陸奥鎮守府前將軍平朝臣良將の次男、相馬小次郎將門、関左にして權威を恣にし、叛逆を發して伯父常陸大掾国香を攻め殺し、常州を侵し奪う。下総国相馬郡岩井郷に新都を建て、桓武の後孫たるに因り自ら僭り

て平親王と号す。剩え帝都を傾け王位を奪わんとす。越おいて源經基武府に在り。時に關に詣りて厥の事を奏し天聴に達す。主上大いに逆鱗あり、諸山の高僧に命じて降敵の秘術を修す。就中、雲居寺の淨藏貴所、横川に大威徳の秘法を行ず〔此の事は略〕「元亨釈書」に見ゆ。遍照寺の寛朝僧正〔敦実王の第二子、寛平法皇の孫なり。寛空より密旨を稟く。是、広沢の祖にして大僧正となる〕、特に将門降伏の勅旨を蒙り、今茲に尊を奉持し、船を難波の津に汎べ、南海の洪波を凌ぎ、布帆恙無くして東し、下総の海岸に着けり。爰に将門の館を距つること何も無き成田里に一字を結び、尊像を安んじ調伏護摩を修すること、宛も頭燃を救うが若し。また平賊追伐の令旨を下し、参議右衛門督藤原忠文・忠舒・源経基等、東関に発向す。下野國藤原秀郷〔世に依藤太と云う〕・平貞盛〔平国香の子〕と将門と茲に一戦す。貞盛「吾が父の仇なり」と謂えば、秀郷心を合わせて同じく将門を攻む。是より将門敗北して、此に俗傳し、彼に踟躕す。時に将門、貞盛が放つ所の矢に中り、馬より落つ。秀郷馳せ来りて将門が首を刎ね、遂に朝敵をして已に亡びしむ。故に忠文・経基等、駿州より帰洛す。是の如き敗亡の事を憶うに、是則ち寛朝僧正修功の致す所不動明王威神の為す所なり。宜なる乎、降伏四魔の本誓、瑜伽三密の神力、豈唐捐からん乎。爾后、寛朝不動尊を捧持して帰離せんとし、其の像を抬ぐるに、兀々として動かず磐石よりも重し。朝公未曾有の想いを成し、則ち合掌閉目して至心に黙禱す。明王髣髴として告げ言わく、「夫、衆生は無辺にして我が願いも亦無尽なり。儻深信機熟の者有らば、処として応ぜざること無し、我再び皇城に還ることを願わず。翻りて思わく、永く此の地に住して

東国の逆徒を鎮め押さえ、渴仰の輩を利益せん」と。縁に繋、僧正、至言肝に銘じ感涙袂を盈たして謂く、「是、大明王、其の居る所も無きに、但に衆生の心想の中に住すの金言、誰か信を起さざらん。奚ぞ其に疑いを容れん」と。既にして故の如く尊を堂上に安んじ、別れを告げて去る。朝公帝都に帰るに暨び、具に斯の事を聞きたまいて主上觀感余り有り、勅して数字の伽藍を締む構え、若干の莊園を喜捨したもう。故山の号に准えて神護新勝寺と名づけ、且は山を成田と称し院を明王と号し、即ち東国鎮護の靈区と為したもう。

抑、当尊は、神用無方にして靈験最も夥し。或は女人産生の苦を抜き、或は海士漂墮の難を救いたもう。若し此の尊持てる所の宝鈕を頂戴せば、狂乱失心の者も立に治り、風濕病患の類も速やかに癒ゆ。此の如きの神効、枚挙に遑あらず。但し信心の浅薄なる者を除く耳。

伝えて言う。この国、生実の大巖寺の開山道誉上人は、浄家の英傑なれども、天資驚鈍なり。学業の狼狽せんことを歎じ、曾て此の尊に帰投し宿り留まり、持念すること凡そ一百日夜を経たり。期限満する夜に方り、境界中に此の尊持てる所の利剣を呑むと夢て覚めたり。覚めて後、正に血の流るるを見る。其の色黧然として其の床を塗漫せり。感喜戦慄し作礼して去る。然る後、慧解人に遭れ、終に石師名徳と成る。尔より降、浄土一派の僧に別れ、諸山負笈の客に通う。或は日を累ねて往詣し、又は穀を断ちて祈願する者、若しは二三、武を接し、或は五七、踵を継ぎて、いまだ曾て絶えず。

恭みて惟るに、大聖明王は、其の本を推ぬれば則ち遮那の華台に

久成せる尊位にして、其の跡を訪えば則ち使者の垂髪を退示せる砂相なり。衆生を哀愍して捨離する時無し。本誓は余尊に勝れ、神変は思議を超ゆ。所謂阿遮一呪の力に、業寿の風忽ちに定まり、無明の波即ち涸る。所以に儀軌には「一たび秘密咒を持たば生々にも奉持せる修行者を加護したもう」と説けり。猶し薄伽梵の「我が身を見る者は菩提心を発し、我が名を聞く者は悪を断ち善を修す」の如し。且は『大日経疏』に云く、「時に仏、又復、一切の障者を息めんが為の故に、火生名三昧を証して此の大摧障の真言を説く。此の真言に大威勢有り、能く一切の修真言者の種々の障難を除く。乃至、仏、道樹に在るとき、此の真言を以ての故に、一切の魔軍、散壊せざること無し。何に況や世間の諸障をや」と又云く、「仏初めて正覚を成じたまひしとき、大集会せる一切漫荼羅所撰の三界の衆に魔醯首羅という者有り。即ち是、三千世界の主にして三千界の中に住す。心慢するが故に、肯て召さるる命に従わずして是の念を作す。『我は是、三界の主なり。更に誰か尊き有りて我を召さん耶』と。尔時、不動明王、白して言さく、『世尊よ、此の有情、何の故にぞ三世諸仏の法を犯すや。当に何事を以てか之を治すべき』と。仏の言わく、『即ち当に彼の命を断つべきなり』と。時に不動明王、即ちこれを持し、左の足を以て其の頂の半月の中を踏み、右の足にて其の妃の首の半月の上を踏み。尔時に大自在天、尋便に命終す。即ち尔時、閻絶の中に於て、無量の法を証し、而して受記を得、灰欲世界に成仏して月勝如来と号す」と云々。

斯の若きの明文、経軌の中に散在するを、今、收拾して以て出だせり。善き哉、係念の人は願に隨いて福を獲、持呪の輩は求に応

じて災を攘う。尊ぶべし敬うべし。諸然れば則ち、明王の本誓、時として暫くも息むこと無く、真言の威力、処として現ぜざるも無し。葉々盟を主り、永く宝祚の天長・台寿の地久を祝ぎ、四民の阜楽・万国の泰寧を鎮り禱る者なり。

往時を相伝し周備せる縁起有りりと雖も、鬱攸の災厄に嬰り其の全きことを得ず。今の番、現住持照範閣梨の素に応じ、旧記の遺簡を披い、古老の口碑を述べ、勉めて其の始末梗概を誌せるを以て責を塞ぐと云う。

元禄十三、歳は庚辰に在り、仲夏念八日

武城愛早田福菟菟覺眼書す。

追加條目

- 一、当寺は従来、江戸弥勒寺の末寺たりと雖も、大檀主稲葉丹後太守侍従正通の願に依り、去る歳丙戌、弥勒寺の末流を離る。今茲に現住照範上京し、嵯峨大覚寺宮の直末寺に加えられ、即ち大覚寺道場に於て、安井門主前大僧正道恕より伝法せられ、即ち是、且は金剛王院家を兼帯する者なり。
- 一、丹後太守、僧録前大僧正隆光に調し、常法談林の願を通ず。而本山の僧正より、今年仲夏、免状を蒙り畢ぬ。
- 一、丹州、莊田五十石を寄附す。
- 一、方丈の額は智積前住僧正専戒の筆、不動堂并に金剛門の榜は安門主前大僧正書き誌さる。尔外、鐘樓・経蔵等は住持照範造立す。

右、現住照範の需に応じ追加す。

宝永四丁亥冬臘月吉日

洛陽智積僧正覚眼誌す。

四 現代語訳

続いて、右の訓読文を下敷きとして現代語訳を示す。できるだけ逐語的な訳になるよう心がけたけれども、漢文（訓読文も同様）に特有の、和文に置き換えがたい表現があるため、必ずしもそうなるてはならず、かなりの程度に意訳した部分もある。翻訳というのも一種の見解・説だから、訓読と見比べて、なぜそう訳した（訳せる）のかに思いを巡らすのも一興であろう。なお（）内の字句は、訳者の加えた補足（蛇足）的文言である。

下総国成田山神護新勝寺本尊来由記

下総国殖生莊の成田山神護新勝寺は、不動明王がご靈験を示される霊場であり、まことに真言密教に相応しい寺院である。

当寺の御本尊不動明王、ならびに矜羯羅・逝吒迦の二童子は、弘法大師がご自身の手によって彫刻された尊像であって、中尊の明王は像高六尺（約一八〇cm）の座像、二体の脇侍はともに像高三尺（約九〇cm）、左脇侍（向かって右）の矜羯羅童子は立像、右脇侍の逝吒迦童子は座像、嵯峨天皇の御世から代々玉体を擁護してきた霊像である。以前には洛西・高雄山にある神護国祚真言寺（神護寺の旧称）護摩堂の御本尊であった。

遠い昔に遡って、この尊像が当山に奉安された由来をたずねてみよう。第六十一代朱雀天皇の御世に、桓武天皇から五代目の後

胤で、陸奥鎮守府前將軍平良將の次男の相馬小次郎將門が、東国で好き勝手に権威を揮い、反逆を起して伯父の常陸大掾国香を攻め殺し、常陸国を侵略する事件があった。將門は下総国相馬郡岩井郷（茨城県坂東市）に新しい都を建て、桓武天皇の血筋であるところから、自ら驕り高ぶって「平親王」と号した。そればかりか、帝都を傾け皇位を奪おうとまでしたのである。このとき、源經基は武蔵守としてその国府にあったが、宮城に参内してそのことを奏上し、それが帝の耳に達した。帝はいたく激怒なさり、諸山の高僧に朝敵降伏の秘術を修するよう命ぜられた。中でも、雲居寺の淨藏貴所（嵯峨天皇の曾孫にあたる）は、比叡山横川において大威徳明王の秘法を行じた―このことは大凡『元亨釈書』に見える―。一方、遍照寺の寛朝僧正―敦実王の第二子で、宇多法皇の皇孫にあたる。寛空阿闍梨から密教を受法した。この方こそ広沢流の祖であって、のちに大僧正となった―は、特別に將門降伏の勅命を承った。僧正はこの尊像を奉持して、難波の港から出帆、南海の荒波を乗り越えて無事に東航し、下総の海岸に着いた。そして將門の居館からさほど離れていない成田の里に草堂を構え、尊像を奉安して調伏護摩を修したのだが、それはまさに火急の事態を救うものであった。また、逆賊平將門を討討せよとの命令が下され、参議右衛門督藤原忠文・忠舒・源經基らが東国に向けて出発した。（その間、下野国の藤原秀郷―世に依藤太と称する―と平貞盛―平国香の子―とが將門と一戦を交えた。貞盛が「我が父の仇だ」と言ったので、秀郷もそれに心を合わせ、ともに將門を攻めた。それから將門は劣勢に転じ、あちらこちらにうろつき彷徨った。そして將門は貞盛の放った矢に中り、馬から落

ちた。そこに秀郷が駆けつけて将門の首を刎ね、ついに朝敵は亡ぼされたのである。このため（下向の途次にあった）忠文・経基らは、駿河国（静岡県中部）から都に引き返した。このような朝敵滅亡の次第を考えてみると、これこそまさに寛朝僧正の護摩修行の功績であり、不動明王の人智不測の御力によるものだといえよう。降伏四魔のご本誓や瑜伽三密の神力（と説かれていること）が、けつして空事でないこと、実にこのとおりである。そののち、寛朝僧正が不動尊を捧持して都に帰るにあたり、尊像を持ち上げようとしたり、磐石よりも重く、如何にしても動かすことができなかった。僧正は「これまでにないことだ」と思い、そこで合掌瞑目して至心に黙禱した。すると、明王の御姿がありありと見え、このようにお告げになった。「よいか。衆生は数限りもなく、したがって（その全てを救うという）我が願いもまた（これで完了したと）尽きることはない。もし我が力を恃みとして深く信ずる者があるならば、いずこであろうとそれに応えぬことはない。我は再び都に還ろうとは思わぬ。むしろ逆に、永く当地に住して東国の逆徒を鎮め、信心渴仰の人々を利益しようと思うのだ」と。ここに至って僧正は、明王の至言を肝に銘じ、感涙にむせびながら言った。「ああ大明王、（満足な堂舎もなく）居場所もございませんのに、ただただ衆生の心や想いの中にこそ住したもうとの金言を承り、誰一人として信心を起さぬ者がおりましたらどうか。また何を疑うことがござりませうや」と。そこで早速、元のとおり尊像を草堂に奉安し、明王にお別れを申し上げて去った。寛朝僧正が都に帰り着くや、事の次第を細かにお聞きになった帝はいたく感銘され、勅命を下されて数多の堂宇を造営し、（財源として）

多くの莊園を寄進なさった。また、かつて尊像が奉安されていた寺院の名「神護国祚真言寺」に准えて「神護新勝寺」と名づけ、同時に、山号を「成田山」、院号を「明王院」と定め、東国鎮護の靈域となされたのである。

そもそも、この不動尊は、ご靈験あらたかなること比類なく、その実例も夥しい。女性の出産時の苦痛を和らげてくださったこともあれば、漁民の漂流などの海難をお救いくださったこともある。もし、この不動尊が手にしておられる宝剣を頭にいたただくならば、狂気乱心した者もたちどころに正気を取り戻し、あらゆる病も速やかに癒される。このようなご靈験は数えきれないほどにある。しかしながら、信心の浅薄な者だけは救っていただけないが。

また次のような言い伝えもある。同じ下総国の生実（千葉市中央区）にある大巖寺の開山道誉上人は、浄土宗の優れた高僧だけれども、生まれつきは愚鈍であった。このままでは学業が躓くことになろうと歎いて、かつてこの不動尊に帰依して参籠したことがあり、持念修行すること、およそ百日を経た。ちょうど満願の夜、お堂の中で不動尊の手にした利剣を呑むと夢に見て目を覚ました。目覚めた後、（夢かと思つたところが）ほんとうに血が流れているのを見た。その色はドス黒く、床一面を濡らしている。（これは明王が利剣を以て咽喉を切り裂き、愚鈍の因となつていた悪血を流し出したのである。それを見て上人は）喜びのあまり身を震わせて、明王を礼拝して下山した。そののち、智慧の働きによる理解力は人に優れ、ついには高名の師僧となった。以来、ただ浄土宗の僧侶のみならず、あらゆる宗派の者の訪問を受け入れて

教え導いた。連日にわたって参詣する者もあれば、また（上人を慕って）穀物断ちをして祈願する者もあり、あるいは二人三人と互いの足跡を踏むように続いて参り、あるいは五人七人と踵を接して詣で、（上人亡き後も、その跡を訪う者は）一向に途絶えることがないのである。

謹んで思いめぐらすと、大聖不動明王は、その根本を推し量るならば、大日如来の華台けだいにおいて久しい以前に成仏された方でありながら、実際の御姿を拝すれば、使者としての垂髪すてはうという（方便のために一歩退いた）姿を示され、しかも片目をつぶっておられる。衆生を哀れみ慈しんで捨て去ることは無い。ご本誓は他の諸尊よりも勝れたもので、顕す神変奇特は凡人の思考・理解を超えている。いわゆる阿遮あし一睨いちげい（不動明王の一睨み）の力により、宿命に翻弄される人生もたちまちに安定し、無知迷妄ゆえの煩惱も即座に消え去る。このゆえに儀軌には「一度でも（不動明王のご真言を学び唱えれば、生々世々にわたってその人を加護してくださる」と説かれている。世尊が「私の姿を目にするだけで菩提心が発り、私の名号を耳にするだけで断悪修善の気持ちに目覚めると言われたのと、まったく同様である。

また『大日経疏』には次のように見える。「またあるとき、世尊が一切の煩惱を消滅させるために、火生名三昧かしょうみやみまいを証し、大摧障の真言を説かれた。この真言には大いに不思議なる力があり、一切の真言を修する者の種々の障難をあらたかに取り除く。あるいは、世尊が菩提樹下にあらせられたとき、この真言の力により、一切の魔軍、ことごとく退散した。まして、この世の諸々の障りがみな消滅することは言うまでもない」と。

さらに次のようにも説かれている。「世尊が初めて正覚を達成されたとき、ありとあらゆる三界の衆生が挙って参集した。（ところが）魔醯首羅まけししらという者がいて、これは三千世界の主しゅであつて、その中心に住していると、そのように慢心していたために、世尊に召されたその命めいに全く従わず、かえってこのように考えた。『我こそ三界の主である。このうえ我よりも尊貴な者が誰あつて召すと命ずるのか（ありえぬことだ）。』そのとき不動明王は世尊に申し上げて、このように言った。『世尊よ、この迷える者は、何ゆえに三世にわたる諸々の御仏たちの本誓の教えを破るのでしょうか。どのようにして彼の迷妄を払いのけたらよいのでしょうか。』世尊は言われた。『すぐに彼の命を断つてしまいなさい』。そこで不動明王が魔醯首羅を持ち上げ、左足で彼の額の真ん中を踏みつけ、右足でその妃の額の上を踏みつけたところ、大自在天（魔醯首羅）はたちまちにして命終つた。その悶絶のうちに数えきれないほどの法を悟り、そして来世には仏となるであろうとの予言を受けた。（その予言どおり大自在天は）灰欲世界かいよくに成仏して、月勝如来と号した」と。

このように明らかな拠り所となる文が、いろいろな経典・儀軌の中に散在するのを、いま拾い集めてここに示したのである。善哉、善哉。一心に念ずる人には願いに従つて福を与えてくださるし、ご真言を唱える者には求めに応じて災厄を攘つてくださる尊ぶべし敬うべし。これこそ正に不動明王のご本誓や、ご真言の不思議な力が、一時も止まることなく、所の分け隔てもなく、発揮されるといふことなのである。時代世代を超えてご本誓はゆるがず、永く天皇のご寿命の長からんこと、臣下の者も末永く安泰

ならんことを寿ぎ、万民豊楽と世界の恒久平和とお護りくださる（私どもも、それを祈り奉る）のである。

（当山には）往時を伝える周到な縁起があつたけれども、火災に罹つたために失われてしまった。このたび、現住照範阿闍梨の要望に応じて、断片的な記録を拾い集め、古老の口伝えを採録し、微力を尽して寺史の概要を記し、以て約束を果たした次第である。

元禄十三年、干支は庚辰、五月二十八日

江戸・愛宕山円福寺の僧、覚眼が書いた。

追加の條目

一、当寺は従来、江戸・弥勒寺の末寺であつたが、大檀越である丹後守兼侍従、稲葉正通公の願いにより、去る丙戌（宝永三年）の年に弥勒寺末を離れた。このたび現住照範和尚が上京し、嵯峨・大覚寺宮の直末寺に加えられ、同時に大覚寺道場において安井ご門跡、前大僧正道恕さま（久我広道の子）より伝法せられた。また、金剛王院（醍醐寺の院家の一つ）の院室を兼帯することとなつた。

一、稲葉公が、僧録（宗派の総務）の前大僧正隆光さまにお目通りし、常法談林（の認可をいただきたい）の願いを申し込まれた。（その結果）両本山の僧正（豊山は尊祐、智山は覚眼自身）より、本年五月に免許状を頂戴した。

一、稲葉公が（財源として）五十石の領地を寄進された。一、方丈の額は智積院の前住である専戒僧正の揮毫されたものである。不動堂（現光明堂）ならびに金剛門（仁王門）の額は

安井ご門跡前大僧正（道恕）がお書きくださった。そのほか、鐘樓・経蔵などは住持照範和尚が造立したものである。

右は、現住照範和尚の要望に応じて追加した。

宝永四年丁亥、十二月吉日

京都智積院の僧正覚眼が誌した。

五 むすび

以上、小稿では成田山新勝寺の「元禄の大縁起」の訓読文と現代語訳とを提示した。近世には、いわゆる寺院本末制度の整備と並行して、その中で少しでも優位の格付けを獲んがために、その由緒来歴を語る（騙る）「縁起」が制作された（神社も同様）。無論それらはそれらとして研究の対象となつているが、そうした作品群の中でも典型的な様相をもつのみならず、殊には本学のバスで日々目にするということもあつて紹介してみた。

本来ならば、もつと一語一語に語注を付けるべきであろう。たとえば、

- 「緬」は何を典拠として「はるかに」と読むか。
- 「関左」がなぜ「東国」と訳されるか。また東国とはどこを指すか。

など、一々に記すことが望ましい。数学の試験では、答えだけ合つていても、それを導き出す過程が正しく示されていないければ×になる。むしろ答えが誤つていても、途中の式が合つていれば部分点をもらえる。小稿は、言わば答えだけしかない。×をくらつて零点となる答案だけれども、さしあたり今回はこれでご容赦いた

だきたい。

最後に、小稿の大学紀要への投稿を快諾された成田山新勝寺の
関係各位に篤く御礼申しあげる。また、毎年のように当初の投稿
申請から豹変したものを提出するゆえ兎角の御迷惑をおかけして
いるに相違ない、本学紀要委員会の諸氏ならびに担当事務職員の
皆様に幾重にもお詫びを申しあげて結びとする。

Reading “Genroku no Ooengi”
(the major history authorized in the Genroku period)
regarding the Naritasan - Shinshoji Temple

YUASA, Yoshimi

キーワード：成田山新勝寺、寺院縁起、元禄年間

Key words : the Naritasan - Shinshoji temple, Stories on the origin or the history of each temple, the Genroku period